

大学生のスマートフォン使用における インターネット依存傾向について

戸田 真次 (大阪教育大学)

1. 緒言

現在、多くの若者の日常生活において、インターネットの利用はなくてはならないものとなっている。総務省の通信利用動向調査によると、日本において2019年の年代別インターネット利用状況は、20-29歳で99.1%、13-19歳で98.4%と、非常に高い利用率となっており、インターネット依存が問題となっている。また、2020年5月25日に新型コロナウイルス感染症の影響により、政府から緊急事態宣言が発令されたことで日本国民の生活様式が変化しつつあり、インターネット依存が加速していることが考えられる。

そこで本研究は、大学生を対象にコロナ禍におけるインターネット依存傾向の特徴および要因について検討することを目的とした。

2. 方法

1) 対象者

本研究の対象者は、大阪府下の0大学に所属する学生204名(男性79名、女性125名)である。対象者には、調査前に調査の趣旨を説明し十分理解を得た上で協力を得た。

2) 調査方法

Googleフォームにてアンケート調査を行った。

3) 調査内容

調査内容として、個人的属性、コロナウイルスによる影響に関する項目、スマートフォン使用におけるインターネット依存度テスト、スマートフォンの使用に関する項目を設定した。

3. 結果と考察

1) 個人属性について

対象者の学年は、1回生50名、2回生26名、3回生47名、4回生81名であり、居住状態は一人暮らしが80名、実家暮らしが124名であった。

2) コロナウイルスの影響について

コロナウイルスの影響でアルバイトを失った、または減少したと答えた対象者の割合は45.6%であった。また、コロナ禍で孤立感や孤独感を感じた対象者の割合は40.2%、コロナ禍で家族と直接話していた対象者の割合は77.0%であった。これらのことか

ら、コロナウイルスの影響で経済的な影響を受けた大学生が約半数おり、人に会う機会が減り、孤独感や孤立感を感じる学生も出てきていたと考えられる。しかし、家にいる時間が増えたり、帰省する学生が増えたりすることによって家族と直接話す機会が多くなったと考えられる。

3) インターネット依存傾向について

スマートフォン使用におけるインターネット依存度テスト結果について検討したところ、高依存群の割合はコロナ前、コロナ禍、現在の順に比較すると5.4%→9.3%→8.8%と、コロナ禍や現在はコロナ前と比較して増加した。この結果から、コロナウイルスの影響により、高依存群に当てはまる学生が増加したと考えられる。

4) 居住状態別の依存傾向について

居住状態別の依存傾向について検討したところ、高依存群の割合では、一人暮らしは3.8%→11.3%→10.0%、実家暮らしは6.5%→8.1%→8.1%と、一人暮らしの学生は実家暮らしの学生と比べ、コロナウイルスによる影響をより大きく受けたと考えられる。

5) 学年別の依存傾向について

学年別の依存傾向について検討したところ、3回生の高依存群の割合が8.5%→19.1%→12.8%と、他学年に比べ大きく変化し、またどの時期においても他学年より極端に割合が高いことが認められた。

6) 学科別の依存傾向について

学科別の依存傾向について検討したところ、高依存群の割合では、体育・スポーツの学生は3.1%→6.2%→3.1%、他学科の学生は6.5%→10.8%→11.5%であり、体育・スポーツの学生はコロナウイルスの影響を受け、高依存群が増加した後に現在は減少したものの、他学科の学生は現在も増加したままとなっていた。これは、体育・スポーツの学生が部活動の再開や、実技などの対面授業が増えたことによると考えられる。

以上より、新型コロナウイルス感染症の影響により大学生のインターネット依存傾向は増加し、居住状態や大学での対面授業等、精神的ケアが必要であることが示唆された。

